

② 横浜FCの誕生と新しいチーム運営

■インタビュアー・辻野臣保

1 サッカー文化とはサッカーという祭りの創造だ

——まずは、JFL(注1)前期ステージの優勝おめでとうございます。全戦全勝ですが、ともかく強いですね。また、人気も高い。昨年のセレクションにも七百人の応募があったと聞きましたか。

辻野 三部リーグではありませんが、指導者の存在が大きいです。リトバルスキー(注2)、奥寺(注3)という世界を経験した人の指導を受けられる、ということが選手にとっても大きい魅力ですね。この指導者たちがいなければ、一部リーグから移籍する選手などあり得なかったです。

——横浜フリーゲルスの消滅、マリノスとの合併の話がでたのが一九九八年秋でした。その後、フリーゲルスが天皇杯で優勝したのが、九九年元旦。同年二月に消滅したわけですが、それから一年半しか経っていないのに、辻野さんたちサポーターは、新しい仕組みによる新チーム横浜FCの結成までもっていかれたわけですね。

辻野 何か遠い昔の話のようです。思い返す暇もないですから。当時はサポーターとしては何も知らされなかった、ということが一番

大きかったです。一言声をかけてくれれば、全然事態は変わっていた、という気もします。親会社は、スポーツを文化としてではなく、一つの事業としてしか考えていなかった。現場は、サッカーが好きな人間がやっている。みんな続けたい、と思っているわけですから。

プロサッカーチームはショービジネス。確かに、プロサッカーチームは、ビジネスなのですが、ものを売るのではない、簡単に言えば、ショービジネスのカテゴリーに入ります。だから、僕は、サッカーはお祭りだ、と言っているわけです。ヨーロッパのサッカーは、お祭りから始まっている。日本だと、みんなでご神体を奪い合う、というような祭りと同じように、町中でサッカーをやっていた訳です。

——いわば、チームへの愛着とか精神面が大きいということですね。

辻野 お祭りの部分を忘れて、興行の部分だけではやっていけない。横浜のサッカーも、そういう祭りとして集約する方向に行きたいのです。

ワールドカップはサッカーの魅力を知る機会。幸い、二〇〇二年には横浜で世界最大の祭

りのワールドカップの決勝戦があるわけです。それを経験し、そのミニ版があちこちにあるという感じをもってもらえれば、嬉しいと思います。

もともと僕は、シナリオライターで、ゴールシーンとかには興味があったけれど、サッカーは何もわからなかった。ある時ジーコ(注4)のパスが光った。スルーパスが輝いて見えた。その時からサッカーの魅力にとりつかれました。広いところを走り回りながら、極めて自由度の高いスポーツであるところも魅力の一つです。個人の創造性が生かされ、何人かがその創造性を支えてゴールが生まれる。コラブレーションであり、ジャズの即興であり、瞬間、瞬間の芸術の創造のおもしろさです。

2 ソシオ制度の理念と市民の、市民による、市民のためのチーム

——横浜フリーゲルスの消滅の時のサポーターとしての体験が、横浜FCのソシオ制度を導入されたきっかけになった訳ですか。

辻野 ソシオ制度は、単純に言えば、頭割の制度だと思っています。もし、チーム運営に一千万円かかるのであれば、それを会員の市

1 サッカー文化とはサッカーという祭りの創造だ

2 ソシオ制度の理念と市民の、市民による、市民のためのチーム

3 チーム運営の課題はまず、スタジアムに足を運んでもらうことから始まる

(注1) JFL(JAPAN FOOTBALL LEAGUE)日本フットボールリーグ、企業チーム、大学チーム、Jリーグ昇格を目標とするクラブなど九チームが参加しているリーグ。J2の下に位置していて三部リーグとも呼ばれている。

(注2) 監督 ■ピエール・リトバルスキー
一九六〇年、ドイツ・ベルリン市生まれ。旧西ドイツ代表FWとして八二年スペイン、八六年メキシコ、優勝した九〇年イタリアと三回ワールドカップに出場。「ドリフターの天才」と呼ばれた。Jリーグが発足した九三年から日本でプレーし、昨年日本でS級コーチの資格を取得し、今回、横浜FCの監督に就任した。

(注3) ゼネラルマネージャー ■奥寺康彦
一九五二年生まれ。相工大付属高校を卒業後、古河電工(現ジェフ市原)に入団。七七年にドイツのブンデスリーグ一部のFCケルンで日本人初のプロ選手となる。ブンデスリーグ優勝等数々の栄誉を受ける。ジェフ市原の監督等を歴任。今回、横浜FCのゼネラルマネージャーに就任。

(注4) ジーコ
一九五三年リオデジャネイロ郊外で生まれ十四歳で名門フラメンゴに入団。ブラジル代表として八十八試合、六十六ゴールを記録。九〇年ブラジルの初代スポーツ大臣に就任。九四年六月現役引退。九五年鹿島総監督。

民が頭割で出す。ソシオとはスペイン語で会員、英語ではメンバーのことです。会員が支払うクラブ会費によって支えられる組織のことで市民参加型のクラブ運営システムです。実際は市民の会費だけでは運営は無理ですから、それを元手にスポンサーを集めて、チームを運営していこうということをやっています。

——市民会員と法人会員とがあるようすが。

辻野 現在、市民会員は丁度三千人。去年から約三百人増えています。法人は三十四法人。会費は一般会員が年間三万円、法人は一口十五万円です。ソシオの会費だけで一億円、必要なチームの運営費は四億円です。今年は三億六千万円まで削っていますが、なかなか厳しい状況です。優勝しても選手の年俸が上がっていかない。ポナナスも出せないとなると、選手のモチベーションが落ちるのが怖いですよ。

ソシオ・フリエスタとのパートナーシップ理想とするところは、スポンサーに頼らない、ソシオ制度による一〇〇パーセントの市民クラブです。実際、スペインのFCバルセロナは、そうしたチーム運営をやっています。横浜FCでは、一万人以上の会員が必要です。そこにたどりつくために、ソシオ・フリエスタという後援会組織を創ったわけですね。会員の一人一人がクラブの一員であり、企業の論理ではないところで、市民会員が関与しながら決めていく方式をとっています。

——会員である市民は、実際の運営にどのように参加しているのですか。

辻野 ソシオの活動としては、もぎりや場内案内、会場でのチューターサービスなどの運営参加、エリアネットワークという活動では、試合のある時には、駅前でのピラ撒き、ポスター貼りなどの手伝いをしています。

ソシオ・フリエスタの理事は会員の投票で選ばれます。そして、(株)横浜フリエスタクラブ(YFSC)とソシオ・フリエスタとは、「スポーツを通じ人を育て、スポーツを通じ町を育てる」との共通理念のもとに協定を締結しています。

定期的な協議会の開催による情報と課題の共有化、会員への議事録の公開、相互の役員派遣による基礎情報の共有化などを行っています。

チーム運営そのものについてはYFSCが責任を持つ訳ですが、基本的には、協力してやっていくパートナーですね。

3 チーム運営の課題はまず、スタジアムに足を運んでもらうことから始まる

——J2参入が当面の目標ですか。

辻野 ソシオのメンバーは、すぐに五千人に増える訳ではない。年三万円の会費がなかなか市民にとっては高い、と感じられる訳です。スタジアムに足を運べば、決して高くない、ということがわかるとは思います。J1リーグでも観客足を運んでもらえない。J1リーグでも観客が一万人入るかどうかが、JFLは、テ

レビ放映もされていないし、おもしろい試合をしていても、スタジアムに足を運ばない限りわからない。ただ、JFLの中では、入場者数は圧倒的に多い方です。平均約四千人に対して他のチームは、多いところで九百人ですから。

——J1リーグに入るためには条件がありますよね。ユースチームを持つとか、ホームグラウンドを持つこととか。

辻野 今年、市内のクラブチームと提携してジュニアユースをつくりました。これが、今後ユースチームの基盤になっていきます。グラウンドは、なかなか市内にもってないかもしれませんが。新横浜の国際総合競技場と長浜と相模原とか、転々としています。監督は、練習場が確保できない、というので、相当ストレスがたまっています。ただ、このチームは横浜を離れたら、意味がなくなります。ソシオの会員も、八五パーセントは横浜市民ですから。

市行政にはグラウンド不足の解消をお願いしたいです。それから将来的には横浜市には五万円でも十万円でも株をもつてほしい、と思っています。

ともかく、今年乗り切れば何とかありますよ。チームの実力は十分ですし、チーム運営の面でも、スポンサーも今年七団体も増えています。中高生二十一人招待や、リトバルスキーのワールドカップの展示などイベントでの盛り上げもしています。ともかく、一人でも多くの人に試合を見に来てほしいです。

△(株)横浜フリエスタスポーツクラブ代表取締役

横浜FCのメンバー

